

## 生活科において感性を豊かに働かせる意義

新美 諒<sup>†</sup> 加納 誠司\*

\*生活科教育講座

### A Study on significance of Working Sense Affluently in Living Environment Studies

Ryo NIMI <sup>†</sup> and Seiji KANO\*

\*Department of Living Environment Studies, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

#### 要 約

本研究は、中央教育審議会答申に示される「感性を豊かに働かせる」ことが、どのような過程を経て行われるものであるのかを考察し、感性を豊かに働かせるとは何かという問いを追究した。そして、見出された感性を豊かに働かせることの捉えを基に、感性を豊かに働かせることが生活科においてどのような意義をもつのかを、生活科の特性に注目しながら探った。その結果、まず、感性を豊かに働かせることが、外部の変化を受けとめた後に引き起こされ、未来を創造することへつながっていくものであると考えられた。そして、ベイリによる共感についての記述を基にして感性を豊かに働かせることを考察し、感性を豊かに働かせることが対象に広く深く共感しようとすることであると捉えられた。この姿は、この世の全ての存在に共感しようとし、かつ、一つの対象が出す細かな小さな刺激まで感じようとしている姿であると考えられる。また、本研究は小学校低学年に設置される生活科の特性として、直接体験の充実と表現活動の重視が目指されてきたことに注目した。感性を豊かに働かせることは、外部の変化を受け止める直接体験と、未来を創造するために重要な表現活動の間で重要な役割を果たすことが考えられ、ここに生活科において感性を豊かに働かせる意義が示唆された。

Keywords : 生活科 感性 共感

#### I はじめに

「感性を豊かに働かせる」ことの必要性が高まっている。2016年に示された中央教育審議会答申『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）』<sup>1)</sup>では、感性を豊かに働かせることが、変化の激しい社会の中でよりよい人生や社会のあり方を考え、自ら設定した問題を解決し、新たな価値を創造していくために重要な役割を果たすとしている。そして同答申は、小学校教育の課題として、「低学年においては、その2年間の中で生じた学力差が、その後の学力差の拡大に大きく影響しているとの課題が指摘されている。（中略）感性を豊かに働かせ、身近な出来事から気付きを得て考えることなど、中学年以降の学習の素地を形成していくとともに、一人一人のつまづきを早期に見いだし、指導上の配慮を行っていくことが重要となる」<sup>2)</sup>と述べている。すなわち、小学校低学年では、教育活動の中で子どもが感性を豊かに働かされるよう配慮することが求められているのである。

小学校低学年だけに設置される生活科は、その新設時より、子どもの感性との強い関わりが指摘されてき

た。寺本潔<sup>3)</sup>は、かつての低学年理科や社会科でねらいとされてきた自然事象や社会事象に対する客観的な観察力よりも、感覚的で主観的で、幼い子どもも独特な感性によるものごとの捉え方が生活科では求められると示している。また、川上昭吾<sup>4)</sup>や加藤智<sup>5)</sup>は、感性を育むという視点において、生活科における直接体験は重要な役割を果たすと示している。

生活科を含めて、教育全体における感性の重要性は高まっているが、教育者や研究者の各々による感性の定義は曖昧な現状である<sup>6)</sup>。先述した中央教育審議会答申においても、感性や感性を豊かに働かせることについての具体的な記述は見られなかった。また、生活科が子どもの感性と深い関わりをもつこと示す先行研究においても、感性の捉え方は研究者によって様々であり、一概に生活科において感性を豊かに働かせる意義を示すことができるとは言えない。生活科において、子どもが感性を豊かに働かせることの意義について、感性を豊かに働かせることを具体的に捉えた上で、それが生活科の特性にどう位置付くのかを考察していく必要があるだろう。

よって本研究は、中央教育審議会答申に示される「感

<sup>†</sup>大学院生

性を豊かに働かせる」ことが、どのような過程を経て行われるものであるのかを考察することによって、感性を豊かに働かせるとは何かという問いを追究していく。そして、見出した感性を豊かに働かせることの捉えを基に、生活科において感性を豊かに働かせることがどのような意義をもつのかを、生活科の特性に着目しながら探っていく。

## Ⅱ 感性を豊かに働かせることと共感

### 1 小学校学習指導要領解説における記述

本研究は、感性を豊かに働かせるとは何かという問いを追究するに当たって、今次改訂の小学校学習指導要領解説総則編<sup>7)</sup>における記述に注目する。感性を豊かに働かせることがどのようなことにつながっていくものであるのか、感性を豊かに働かせることがどのようなことをもって行われるものであるのかを探ることによって、感性を豊かに働かせることの前後にあるであろう人間の営みを示し、これを本研究における感性を豊かに働かせることの捉えの一つとしていく。

小学校学習指導要領解説総則編の第1章の1、「(2)改訂の基本方針」では、「中央教育審議会答申においては、予測困難な社会の変化に主体的に関わり、感性を豊かに働かせながら、どのような未来を創っていくのか、どのように社会や人生をよりよいものにしていくのかという目的を自ら考え、自らの可能性を發揮し、よりよい社会と幸福な人生の創り手となる力を身に付けられるようにすることが重要であること、こうした力は全く新しい力ということではなく学校教育が長年その育成を目指してきた『生きる力』であることを改めて捉え直し、学校教育がしっかりとその強みを發揮できるようにしていくことが必要（下線は筆者による）」<sup>8)</sup>と記述されている。

ここに示される中央教育審議会答申にあたる「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」の第1部第3章、「1. 学校教育を通じて育てたい姿と『生きる力』の理念の具体化」では、「教育基本法が目指す教育の目的や目標に基づき、先に見た子供たちの現状や課題を踏まえつつ、2030年とその先の社会の在り方を見据えながら、学校教育を通じて子供たちに育てたい姿を描くとすれば、以下のような在り方が考えられる。（中略）変化の激しい社会の中でも、感性を豊かに働かせながら、よりよい人生や社会の在り方を考え、試行錯誤しながら問題を発見・解決し、新たな価値を創造していくとともに、新たな問題の発見・解決につなげていくことができること（下線は筆者による）」<sup>8)</sup>と記述されている。

以上の記述から、まず、学習指導要領解説に示される「感性を豊かに働かせる」ことは、よりよい社会や幸福な人生を創り出すなど、未来を創造するために重

要な役割を果たすことが考えられる。さらに、未来を創造することに関わって、小学校学習指導要領解説総則編第3章第1節の2、「(2)豊かな心」では、創造性について説明がある。ここには、創造性とは、「感性を豊かに働かせながら、思いや考えを基に構想し、新しい意味や価値を創造していく資質・能力であり、豊かな心の涵養と密接に関わる（下線は筆者による）」<sup>10)</sup>と記述されている。すなわち、未来を創造する力と言える創造性にも、感性を豊かに働かせることが重要な役割を果たしていることがわかる。これらの関係性を整理すると、人間は感性を豊かに働かせることによって未来を創造していると考えられる。よって、感性を豊かに働かせることの後には、未来を創造することが行われると考えられるのである。

では、感性を豊かに働かせることの前には、どのような人間の営みがあるのであろうか。中央教育審議会答申には、感性を豊かに働かせることについて、「解き方があらかじめ定まった問題を効率的に解いたり、定められた手続を効率的にこなしたりすることにとどまらず、直面する様々な変化を柔軟に受け止め、感性を豊かに働かせながら、どのような未来を創っていくのか、どのように社会や人生をよりよいものにしていくのかを考え、主体的に学び続けて自ら能力を引き出し、自分なりに試行錯誤したり、多様な他者と協働したりして、新たな価値を生み出していくために必要な力を身に付け・・・（後略、下線は筆者による）」<sup>11)</sup>と記述がある。この記述からも、感性を豊かに働かせることが、よりよい社会や人生の創造という、未来を創造することにつながりをもっていることがわかる。しかし、この記述において、感性を豊かに働かせることの前にある人間の営みに注目すると、それは「直面する様々な変化を柔軟に受け止める」こととして見出される。すなわち、感性を豊かに働かせることの前には、様々な変化という外部の変化を受け止めることが、人間の営みとしてなされていると考えられるのである。

以上に示してきたように、小学校学習指導要領における記述から、感性を豊かに働かせることの後には、未来を創造することが行われると考えられる。また、感性を豊かに働かせることの前には、外部の変化を受けとめることが行われると考えられる。

このことは、「**Ⓐ**感性を豊かに働かせる」ことと「**Ⓑ**外部の変化を受けとめる」こと、「**Ⓒ**未来を創造する」ことという3様の人間の営みとして要素化することで、「**Ⓑ**外部の変化を受けとめる」→「**Ⓐ**感性を豊かに働かせる」→「**Ⓒ**未来を創造する」のように、一連の流れとして表すことができる。

## 2 ベイリの示す「共感」

本研究はここまで、小学校学習指導要領における記述から、感性を豊かに働かせることの前後にある人間の営みを示してきたが、感性を豊かに働かせることが何なのかという本質的な問いに触れることはできなかった。

感性を豊かに働かせることの本質に迫るために、本研究はL・H・ベイリ<sup>12)</sup>による記述に着目した。ベイリは自然体験を通して感覚や感受性を養うことの重要性を示している。ここでベイリによる、「もっとも幸福な生活とは、世界と接触する点をもっとも多く持つものであり、存在するすべてのものにもっとも深い共感を持つものである」<sup>13)</sup>という記述に注目したい。

このベイリによる記述は、「①もっとも幸福な生活」、「②世界と接触する点をもっとも多く持つ」、「③存在するすべてのものにもっとも深い共感を持つ」という3つの項に分けることができる。この3つの項を、先述した感性を豊かに働かせることの前後にあるであろう人間の営みと比較していくと、まず、ベイリによる「①もっとも幸福な生活」が、人間が未来に目指すべきものを示していることから、本研究の捉えである「◎未来を創造する」ことに通ずる意味合いをもっていることが考えられる。そして、ベイリによる「②世界と接触する点をもっとも多く持つ」は、外部の世界と接触する場面を多くもつことを示し、それが外部からの刺激を受け止めることにつながることから、本研究の捉えである「㊦外部の変化を受けとめる」ことに通ずる意味合いをもっていることが考えられる。

以上の比較を踏まえると、ベイリによる「③存在するすべてのものにもっとも深い共感を持つ」ことが、本研究の捉えである「㊦感性を豊かに働かせる」ことに通じていると推測される。つまり、人やものといった、この世の全ての存在に深く共感することが、感性を豊かに働かせることとただならぬ関係性があると示唆されるのである。

## 3 外部の変化を受け止めることと共感

では、共感することとは具体的にどういうことなのであろうか。このことを、感性を豊かに働かせることの前に行われる、外部の変化を受け止めることに着目しながら捉えていく。

ベイリが重要だと示してきた自然体験を通じた学習に関わって、八嶋真理子は、理科における磁石の実験を通して、「磁石の同極同士を近づけたときの、何とも言えない退け合う手応えとか、離れた空間に働くはね返す力とか、何か普通ではないと感じる瞬間、子どもは『すごい』を連発する。たとえ、磁石の性質が『同極同士は退け合い、異極同士は引き合う』と一言でまとめられても、その背景には、子どもが全身で感じ取った情報がたくさんある。だから、空間に働く

力を考えるようなとき『あれ、磁石のN極同士みたいな力かな』というように考えをつくる種になるのだ。体験を通してつくられた知識は、次の体験と結びつきながら新たな考えを創り出す豊かさをもっているといえるだろう」<sup>14)</sup>と述べている。ここに述べられる、実験を通して子どもから出た「すごい」という発言について、中村雄二郎<sup>15)</sup>による記述を基に考察していく。

中村は、スピノザの示す同類感情に着目した理論の証明として、「事物についてのさまざまな像は人間身体の変様であり、その観念は外部の物体をわれわれの目のまえにあるように描き出す。つまり、そのような観念はわれわれの身体の本性ととも外部の物体の現在の本性を含んでいる。したがって、もし外部の物体の本性がわれわれの身体の本性に似ているときには、われわれの想像する外部の物体の観念はその物体の変様に似た身体の変様を含んでいる。」<sup>16)</sup>と述べている。身体の変様については、『身体の変様の観念』というのは、『外界の事物』と『身体』と『精神』とが結びついた、それら相互の働きかけのなかで成り立っている。したがって、身体の変様を媒介とすることなしにはどのような認識もありえない、ということになるわけである。また、身体の変様は、ときに『感覚』と言いかえてもよいものであるから、そのとき身体の変様の観念とは感覚作用そのものを感じることでなり・・(後略)」<sup>17)</sup>と述べている。すなわち、感覚とも言い換えられる「人間身体の変様」が行われる中で、外界と自分の体、自分の精神は相互に働き合うとされている。そして、人間身体の変様によって、人間は外部の物体である人やものという対象の像を表象し、対象を認識するとされている。また、ここに表象される対象の像の本質が自分の本質と似ているときには、人やものの変化が自分の変化に直結するとされている。

八嶋の記述にあった「すごい」と発言する子どもの姿は、磁石の実験を通して内部に変化が引き起こされた子どもの姿と言えるだろう。中村の記述を基にすると、子どもの変化は、磁石の変化を身体を通して感じ取ったことにより引き起こされたものとするのであろう。磁石は日常生活でよく使われるものであり、子どもの生活範囲に存在している。したがって、磁石は、ほとんどの子どもにとって身近で触れ合いの機会が多い存在だと考えられる。磁石が身近な存在で、精神的な距離が近いことによって、子どもの中に表象される磁石の像は、同じ空間で生活している親近感があるものというように、本質の似た存在と言えるものとなるだろう。こうして、極性によって退け合ったり引き合ったりする磁石の変化が、「すごい」の言葉に表れる子どもの感情の変化に直結するのである。

つまり、人間は外部にある精神的な距離の近い対象の変化を感じ取ることによって、自分の内部に変化が引き起こされると考えられる。自分の内部の変化とは、

人やものに対して「すごい」と思うような驚きや面白さ、また喜びや悲しみといった感情の変化である。これが自分の本質と似ている対象の像の変化によって引き起こされるということから、この感情の変化こそが「共感」することだと捉えることができよう。よって、外部にある精神的な距離の近い対象の変化を感じ取ることにより、共感という自分の内部の変化が引き起こされると考えられるのである。

#### 4 未来を創造することと共感

先述したように、共感することとは、自分の内部の変化であり、それは外部にある精神的な距離の近い対象の変化を感じ取ることによって引き起こされるものであると考えられた。また共感とは、人やものに対して「すごい」と思うような驚きや面白さ、また喜びや悲しみといった感情の変化であり、自分の内部に表象される対象の像の変化によって引き起こされるものと捉えられた。ここで本研究は、さらに、共感することと未来を創造することの関わりを、表象することに着目しながら探っていく。

大辞林第二版では、表象の意味について、「感覚の複合体として心に思い浮かべられる外的対象の像。知覚内容・記憶像など心に生起するもの。直感的な点で概念や理念の非直感作用とは異なる。心像。観念。」<sup>18)</sup>と説明している。すなわち表象は、想像やイメージに近い意味をもち、対象の像を表象するとは、対象の像を心に思い浮かべることとすることができる。福岡教育大学教育学部附属小倉小学校は、「人間が、ある対象〈もの・こと〉を感受すると、そこにイメージがうかぶ。ここでいう『イメージ』とは、『心の中に思い浮かべる像。心象』であり、次の行動、思考などを生むきっかけとなるものである」<sup>19)</sup>と述べている。すなわち表象することは、人間が人やものを感受することによって起き、人間の次の行動や思考を促すと言える。

片岡徳雄<sup>20)</sup>は、体験から得た対象の像が、別の場面で触発されて新しく組み合わせられることによって、創造が行われると指摘している。片岡は、そのことを「創造とは『破壊、飛躍、そして再建』」<sup>21)</sup>と端的に述べている。すなわち創造とは、3つの段階によってなされるとわかる。1つ目の段階では、ある体験から得た対象の像を破壊してバラバラに分解し、2つ目の段階でバラバラにした像の要素をその体験の枠から飛躍させて他の体験と結び付けていく。そして3つ目の段階で、無数の体験を通して得たイメージや像の要素とともにそれらを再構成していくことによって、創造がなされていくのである。

人間は対象の像を表象することによって、行動が促されて新たな体験へ向かうようになり、思考が促されて体験で得てきたものを結び付けて考えるようになったりする。体験で得てきたものとは、無数の体験

から得た対象の像をバラバラにした像の要素である。この像の要素が結び付けられることによって、新たな像が創り出され、創造につながっていく。このことは、体験で得た知識が、次の体験と結びつきながら新しい考えを創造するとしている八嶋の記述と通じている。

ここで、先述してきた「共感」の捉えに立ち戻ると、それは対象に対する驚きや面白さといった感情の変化であり、人間が対象の変化を感じ取り、内部に表象する像が変化することによって引き起こされるものであった。すなわち、共感することも、創造することも、人間の内部に表象される像によって引き起こされるものだと捉えられる。

しかしながら、共感することは、感情の変化という点で創造することとは違う。むしろ、共感することは、行動や思考の原動力という意味合いをもつものであろう。対象に共感し、驚きや面白さという感情をもつことによって、人間は行動が促されて新しい体験へ向かったり、体験で得た対象の像を思考によって要素化したりすることが促される。こうして無数の体験から無数の像の要素を獲得し、それらを再構成することによって、創造が行われる。よって、ここに共感することと創造することの関わりを見出すことができよう。

### Ⅲ 「感性を豊かに働かせる」とは

#### 1 対象に広く深く共感しようとする

以上に示してきたように、対象に共感することとは、自分の内部の変化であり、外部にある精神的な距離の近い対象の変化を感じ取ることによって引き起こされるものだと考えられた。また、共感とは、人やものに対して「すごい」と思うような驚きや面白さ、また喜びや悲しみといった感情の変化であり、自分の内部に表象される対象の像の変化によって引き起こされるものと捉えられた。そして、共感することは、無数の体験から無数の像の要素を獲得するための、行動や思考の原動力となるものと考えられた。ここで得た像の要素を再構成することによって、創造が行われる。

ここまでの捉えを振り返ると、本研究は対象に共感することが、外部の対象の変化を感じ取ることによって引き起こされるものとしてきた。このように、共感することの捉えには、受動的な意味合いが強くあるように思われる。ここで本研究は、「感性を豊かに働かせる」ことの本質を追究していくために、共感することの捉えに能動的な意味合いを付け加えていく。

この方向性に関わって、片岡による情操の定義に注目したい。片岡は、「情操とは、『価値あるものに向かう感情』」<sup>22)</sup>と述べている。すなわち、片岡の示す情操は感情の一種であり、希望や再生といった人間の価値感に関わって突き動かされるものである。片岡はさらに、情操が直感的であり一瞬のうちに人間を突き動かすものであること、情操が想像やイメージと大い

に関わるものであること、そして、情操が刺激に反応するばかりの受け身のものではなく、積極的に外へ働きかける未来志向的なものであることを補足している。そして、片岡は情操が受け身のものでないことについて、「人には外界からの刺激を選ぶ主体性が生まれ、人によってその選び方に一つの傾向が生まれることになる」<sup>23)</sup>と述べており、心の奥底にあるものが刺激の中から好みのものを選び、それによって自己がつくられていくことを示している。このように、情操には主体性があることから、情操が思考や意志や創造の働きと分かちがたい自己実現の欲求に近いものであると、片岡は示している。

この片岡による情操の定義に見られる、外界からの刺激を選ぶ人間の主体性というものは、対象に共感することにおいても関わるであろう。何に共感するか、どのくらい共感するかというように、人間が外部から受ける様々な刺激に対して、意識下もしくは無意識下を問わずにどう取舍選択するのかという点において、共感することには主体性が存在すると考えられる。

寺内定夫は、サワガニやカイコといった大人がなかなか触りにくい生き物に子どもが向かうことについて、「弱々しいもの、はかないもの、小さなもの、おとなしいものの生命に、子どもの感情が磁石に吸い寄せられるように魅かれ、共感しているのです。(中略)それは子ども自身の生命が小さく弱いからこそ、同質の存在に寄せる『小さき者への親近感情』なのでしょう。」<sup>24)</sup>と述べ、幼い子どもが自分と同じように弱くはかない生命をもつ生き物に、見た目を問わず共感できると示している。また寺内は、子どもはどんな小さな動物にでも仲間扱いの心を寄せ、噛まれたり吠えられたりした体験で恐怖心が残らなければ、生命あるものへの好奇心がそのまま親しみの感情となるとしている。この幼い子どもの姿に見られる親近感や好奇心は、大人ももつものであり、人間を無意識のうちに様々な対象を感じることに向かわせる。すなわち、親近感や好奇心が、外部から受ける様々な刺激を無意識のうちに取舍選択するという働きをし、人間が共感することへ向かうための着火剤となっていることが考えられる。

また、レイチェル・カーソンは、神秘さや不思議さに目を見張る感性とされる“センス・オブ・ワンダー”を唱える中で、「子どもたちがであう事実のひとつひとつが、やがて知識や知恵を生み出す種子だとしたら、さまざまな情緒やゆたかな感受性は、この種子をはぐくむ肥沃な土壌です。(中略)美しいものを美しいと感じる感覚、新しいものや未知なものにふれたときの感激、思いやり、憐れみ、賛嘆や愛情などのさまざまな形の感情がひとたびよびさまされると、次はその対象となるものについてもっとよく知りたいと思うようになります」<sup>25)</sup>と述べている。ここに述べられる

「さまざまな情緒やゆたかな感受性」とは、本研究でいう対象への共感と、それによって引き起こされる感情の変化とすることができよう。カーソンの述べることを基にすると、人間は、対象の変化を感じ、感情が突き動かされる共感を通して、対象の像の変化をより明確にしたいと思うようになると考えられる。

つまり、共感することには、無意識下での親近感や好奇心による第一歩的な主体性が存在する一方で、「対象が出す刺激をもっと感じたい」という姿に見られる、共感することを追究するような主体性も存在すると考えられる。

そして本研究は、人やものといった、この世の全ての存在に深く共感することが、感性を豊かに働かせることとただならぬ関係性があると先に示唆してきた。この関係性と、共感することの主体性を踏まえると、感性を豊かに働かせることの本質は、「対象へ広く深く共感しようとする」ことだとできるだろう。

ここに示す「対象へ広く深く共感しようとする」との多少を補足すると、対象へ広く共感しようとするとは、この世の全ての存在に共感しようとするものであり、対象とつながりをもつものが出す刺激まで感じたいとする姿である。また、対象へ深く共感しようとするとは、対象への共感を追究することであり、対象が出す細かな小さな刺激まで感じようとする姿である。すなわち、広く深く共感しようとするとは、深く共感しようとすることと、広く共感しようとすることの両立によってその主体性が示されるのであり、そのどちらかが失われてはならない。両方の共感しようとすることにある主体性が相互に高まり合うことによって、感性を豊かに働かせることとなるのである。

## 2 感性を豊かに働かせる子どもの姿

以上に示してきたように、本研究は感性を豊かに働かせることについて、以下のように捉えてきた。

- ①：感性を豊かに働かせることは、様々な変化を受けとめた後に行われることであり、また、未来を創造することにつながっていく。
- ②：外部にある精神的な距離の近い対象の変化を感じ取ることによって、自分の内部の変化である「共感」が引き起こされる。この内部の変化は、驚きや面白さといった感情の変化である。
- ③：感性を豊かに働かせることは、対象に広く深く共感しようとすることである。具体的には、対象とつながりをもつものが出す刺激や、対象から出る小さな刺激まで感受しようとして、主体的に共感することへ向かっている姿である。

ここで、以上の捉えを踏まえて、感性を豊かに働かせる子どもの姿に迫っていきたい。子どもの発達段階を小学生低学年とすると、感性を豊かに働かせる子どもは図1のような過程を経て対象に働きかけていると

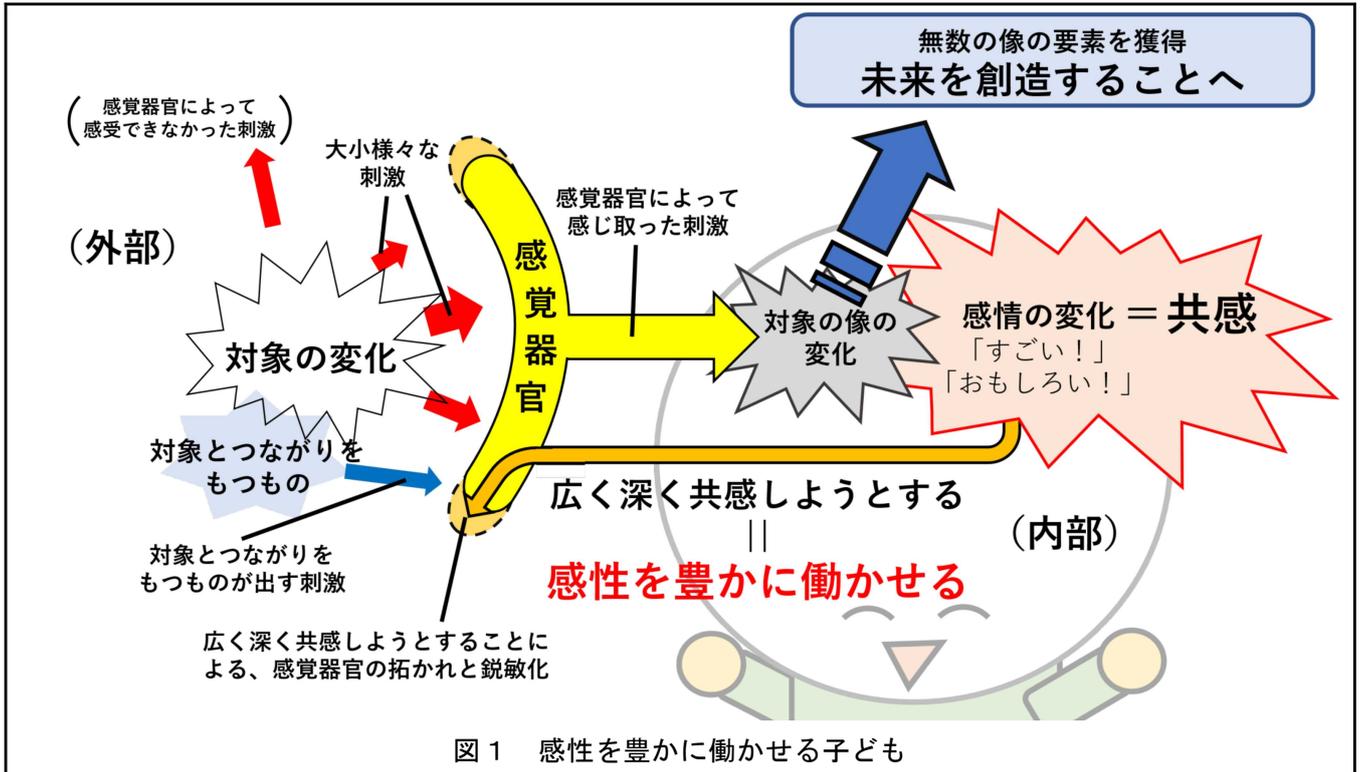


図1 感性を豊かに働かせる子ども

考えられる。

本研究は図1に表される通り、外部の対象の変化による刺激を感受するアンテナ的な器官を“感覚器官”とし、これが子どもの内部に表象される対象の像の変化を引き起こすと考えた。そして、対象の像の変化は共感と言い換えられる感情の変化を引き起こす。共感によって、子どもは広く深く共感しようとし、刺激を感受する感覚器官が拓かれ鋭敏になっていく。感覚器官が拓かれることによって、対象とつながりをもつものの出す刺激を感受できるようになり、広く共感することにつながっていく。また感覚が鋭敏になることによって、対象の出す小さな刺激を感受できるようになり、深く共感することにつながっていく。

そして、子どもが多くの体験を通して感性を豊かに働かせ、多くの対象に広く深く共感しようとすることにより、子どもは無数の像の要素を獲得していく。この像の要素を再構成することによって、子どもは未来を創造するのだと考えられる。

#### IV 生活科において感性を豊かに働かせる意義

##### 1 生活科の教科の特性

小学校低学年に生活科が新設された理由について、小原友行<sup>26)</sup>は、[(1) 活動と思考が未分化で、具体的な活動を通して思考するという発達特性をもつ低学年の児童への配慮]、[(2) 幼稚園教育と小学校教育との接続・発展を図ることによる、児童の連続的な発達という点にある大きなギャップの排除]、[(3) 児童の生活環境が変化したことによる体験や経験の不

足、生活習慣の未確立や生活技能の低下という問題状況への対応]、[(4) 低学年社会科・理科にあった教師中心で表面的な知識の伝達にとどまる学習指導への反省]を挙げている。小原の示すいずれの理由においても、子どもが対象と直接関わり体験することが重要な役目をもっている。

原田信之は、「それまで日本の教育方法の主流であった『教師が教え、それを児童が学ぶ』教育から、『児童が自ら学ぶ』教育へ、(中略) また、『直接体験を通して学んだことを、自らの生活や身近な社会・自然の構成に生かすことのできる』生活重視の教育へと、生活科は学校教育の指導理念を転換させるシンボルとしての役割も果たした<sup>27)</sup>と述べ、新設された生活科は従来の教科と違う特性をもつことを示している。

中野重人は、生活科という教科について、「生活科は座学になじまない。具体的な活動や体験を通して学ぶことが大切なのである。その具体的な活動や体験とは、例えば、調べる、探す、育てる、作る、遊ぶなどの活動である。そして、調べたり、育てたり、遊んだりしたことを、言葉、絵、動作、劇化などによって表現していくことである。このような活動がない授業では、およそ生活科の授業とはいえないのである<sup>28)</sup>と述べ、その特性を強く訴えている。

生活科は子どもの生活場면을重視した教科として、具体的な活動や体験という直接体験から得られた学びを、自分の生活及び自分に関わる社会や自然に生かしていくことができる子どもの育成を目指してきた。

そして、朝倉淳は、生活科という教科の特性として

具体的な活動や体験を重視していることに注目し、「生活科では具体的な活動や体験が、目標でもあり内容でもあり方法でもあるという位置付けがなされている」<sup>29)</sup>としながらも、「『やっただけ』『楽しいだけ』の活動や体験に終わってしまうことが危惧される」<sup>30)</sup>と述べている。かつてより直接体験を重視した教育は〈這い回る経験主義〉や〈活動あって学びなし〉というような批判が付きものであった。しかし、朝倉の示すことを捉え直せば、生活科は、直接体験をすべての場面において充実させながら、気付きや思考といった学びを習得させることを目指す教科であることがわかる。

野田敦敬は、生活科での学びである気付きの習得について、「直接体験は整理されていないので、それだけでは気付きの定着は難しい。そこで、生活科では、表現活動を重視している。(中略)言葉・絵・身振りなどを使って、その子なりの表現方法で体験したことを表すことにより、気付きが定着していく」<sup>31)</sup>と述べている。また、原田は、「『体験が人を雄弁にする』といわれるように、実体験はことばを豊かにし、逆にことばに表出することで体験がその子にとって意味あるものへと価値付けられていく。そのことが自分の生活や自分自身について考えさせることにもつながる。この双方向性を視野に入れることが大事であり、生活科における『体験の充実』と『ことばの重視』は表裏一体の関係にあると言える」<sup>32)</sup>と述べている。これらことから、生活科における気付きや思考といった学びは、直接体験を経て表現活動をするにより習得につながっていくことがわかる。

以上のことから、生活科は、直接体験の充実とそれを通した表現活動の重視が肝要であることがわかる。対象へ直接関わり働きかけることによって得られた気付きや思考といった学びは、表現活動において整理することで習得される。今次改訂の小学校学習指導要領における生活科の教科目標でも、生活科の前提となる特質として具体的な活動や体験を通すことが示されており、さらに、「具体的な活動や体験とは、例えば、見る、聞く、触れる、作る、探す、育てる、遊ぶなどして対象に直接働きかける学習活動であり、また、そうした活動の楽しさやそこで気付いたことなどを言葉、絵、動作、劇化などの多様な方法によって表現する学習活動である。教科目標の冒頭に具体的な活動や体験を通してとあるのは、生活科の学習はそうした活動や体験をすることを前提にしていることを示している」<sup>33)</sup>と述べられている。つまり、生活科における直接体験の充実と表現活動の重視は、生活科の新設時から現在に至るまで根幹に位置し続けている、教科の特性と考えられるのである。

## 2 生活科において感性を豊かに働かせる意義

本研究では、感性を豊かに働かせることが、対象に広く深く共感しようとする事だと捉えられた。また、感性を豊かに働かせることが、外部の変化を受けとめた後に引き起こされ、未来を創造することへつながっていくことを示してきた。

ここで本研究は、感性を豊かに働かせることの捉えを基に、生活科において感性を豊かに働かせる意義について、小学校学習指導要領解説生活編に示される直接体験の充実と表現活動の重視に注目しながら探っていく。

小学校学習指導要領解説生活編では、対象に直接働きかける直接体験について、「児童が身近な人々、社会及び自然に一方向的に働きかけるのではなく、それらが児童に働き返してくるという、双方向性のある活動が行われることを意味する」<sup>34)</sup>とされている。このことから、対象へ直接働きかける直接体験とは、子どもが対象へ直接働きかけるだけでなく、外部の様々な変化を受けとめることもする活動であると言える。

さらに小学校学習指導要領解説は、具体的な活動や体験を通すことが生活科の学習の前提であるとしつつ、「生活科は、児童が体全体で身近な環境に直接働きかける創造的な行為が行われるようにすることを重視している」<sup>35)</sup>としている。ここに示される創造的な行為とは、言葉や絵、動作などによって活動の楽しさや気付きなどを表現する活動である。表現することについては、「生活科では、思いや願いの実現に向けて、『何をするか』『どのようにするか』と考え、それを実際に行い、次の活動へと向かっていく。その過程には、様々な思考や判断、表現が存在している」<sup>36)</sup>とされている。すなわち、生活科においては、子どもが直接体験を通してもらった対象への思いや願いを基に活動し、その過程では、表現活動を通して思考や判断や表現を一体的に行っていると言える。表現活動を通して思考や判断や表現が一体的に行われ、思いや願いの実現に向けた次の活動が生まれることは、子どもが未来を創造しているとも言い換えられよう。

したがって小学校学習指導要領解説は、直接体験と表現活動について、[①直接体験とは、外部の対象から様々な変化を受けとめることである]、[②表現活動とは、思考や判断と一体となって未来を創造することである]のように示していると考えられる。感性を豊かに働かせることとは、対象について広く深く共感しようとすることであり、対象の変化から刺激を感受し、対象の像が変化するとともに感情の変化(共感)が引き起こされ、さらに対象への共感を追究していくことであった。そして、共感することの追究を通して、対象の像の要素が無数に獲得され、それらを再構成することによって創造が行われる。つまり、感性を豊かに働かせることは、外部の変化を受け止める直接体験

と、未来を創造するために重要な表現活動の間で重要な役割を果たすことが考えられよう。

以上のことから、小学校学習指導要領解説にも踏襲されている、生活科における直接体験の充実と表現活動の重視にとって、感性を豊かに働かせることは不可欠だとも言える。ここに、生活科において子どもが感性を豊かに働かせることの意義が、直接体験の充実と表現活動の重視が求められている生活科という教科の特性から示唆されるのである。

## V おわりに

本研究は、感性を豊かに働かせることについて、小学校学習指導要領解説の記述を基に、ベイリによる共感についての記述を用いて考察した。そして、感性を豊かに働かせることが、対象に広く深く共感しようとすることであると捉えられた。この姿は、この世の全ての存在に共感しようとし、かつ、一つの対象が出す細かな小さな刺激まで感じようとしている姿であると考えられた。

そして、本研究は生活科の特性として、その新設時から直接体験の充実と表現活動の重視が目指されてきたことに注目した。感性を豊かに働かせることは、外部の変化を受け止める直接体験と、未来を創造するために重要な表現活動の間で重要な役割を果たすことが考えられた。ここに生活科において感性を豊かに働かせる意義が示唆された。

しかしながら、本研究では、生活科において感性を豊かに働かせる意義が示唆されても、生活科において感性を豊かに働かせることが、どのような教育活動によってなされるものなのか、どのような子どもの活動によってなされたと言えるものなのかという点は明らかにできなかった。本研究の課題はこの点であり、感性を豊かに働かせる教育活動や子どもの活動のあり方について、具体的に示していく必要があるだろう。

## 註

<sup>1</sup> 中央教育審議会『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）』、2016

<sup>2</sup> 前掲書 1）、p.84

<sup>3</sup> 寺本潔『感性が咲く生活科』、大日本図書、1993

<sup>4</sup> 川上昭吾執筆、嶋野道弘、川上昭吾編著『新しい学力観に立つ生活科の学習指導と評価』、明治図書出版株式会社、1994、pp.22-23

<sup>5</sup> 加藤智執筆、中野真志、加藤智編著『改訂 探究的・協同的な学びをつくるー生活科・総合的学習の理論と実践ー』、株式会社三恵社、2015、pp.59-76

<sup>6</sup> 北川祥子、川上昭吾「感性教育についての総合的研究 Iー理念の整理」、『日本生活科・総合的学習教育学会 令和元年度 第 28 回全国大会 大分大会 ～大会研究紀要～』、

日本生活科・総合的学習教育学会、p.178、2019

<sup>7</sup> 文部科学省『小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 総則編』、東洋館出版社、2018

<sup>8</sup> 前掲書 7） p. 3

<sup>9</sup> 前掲書 1）、p.13

<sup>10</sup> 前掲書 1）、pp.24-25

<sup>11</sup> 前掲書 7）、p.10

<sup>12</sup> L・H・ベイリ『自然学習の思想＝宇佐見寛訳』、明治図書出版株式会社、1972

<sup>13</sup> 前掲書 12）、p.26

<sup>14</sup> 八嶋真理子執筆、日置光久、森本信也編著『「体験」で子どもを動かすには 豊かな自然体験と科学的な体験』、東洋館出版社、2007、p.193

<sup>15</sup> 中村雄二郎『感性の覚醒』、岩波書店、1974

<sup>16</sup> 前掲書 15）、p.123

<sup>17</sup> 前掲書 15）、p.104

<sup>18</sup> 松村明、三省堂編修所編『大辞泉第二版新装版』、株式会社三省堂、1999、p.2202

<sup>19</sup> 福岡教育大学教育学部附属小倉小学校『子どもの感性が生きて授業づくり』、明治図書、1994、p.17

<sup>20</sup> 片岡徳雄『子どもの感性を育む』、日本放送出版協会、1990

<sup>21</sup> 前掲書 20）、p.100

<sup>22</sup> 前掲書 20）、p.75

<sup>23</sup> 前掲書 20）、p.76

<sup>24</sup> 寺内定夫『感性があぶない』、毎日新聞社、1989、p.59

<sup>25</sup> レイチェル・カーソン『センス・オブ・ワンダー（＝上遠恵子訳）』、新潮社、1996、pp.25-26

<sup>26</sup> 小原友行執筆、朝倉淳編『生活科教育学』、協同出版株式会社、2002、pp.15-20

<sup>27</sup> 原田信之執筆、原田信之、須本良夫、友田靖雄編著『気付きの質を高める生活科指導法』、東洋館出版社、2011、p.15

<sup>28</sup> 中野重人執筆、熱海則夫、近藤信司、高岡浩二監修、中野重人、椎名仁編著『実践 新しい授業のハンドブック 小学校生活科編』、株式会社太陽書林、1991、p.28

<sup>29</sup>、<sup>30</sup> 朝倉淳編『生活科教育学』、協同出版株式会社、2002、p. 7

<sup>31</sup> 野田敦敬『生活科授業のすべてが分かる QA マニュアル』、明治図書出版株式会社、1998、p.29

<sup>32</sup> 前掲書 27）、p.34

<sup>33</sup> ～ <sup>35</sup> 文部科学省『小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説生活編』、東洋館出版社、2018、p.10

<sup>36</sup> 前掲書 33）、p.14

## 付記

北川祥子氏には、資料収集の際に、大変貴重な資料を貸していただきました。この場を借りて御礼申し上げます。